

夜想  
茶会記  
#07

## 未生の菴いおりから

/// 2018.3.24号



photo by Ayami Nakashima

中井英夫さんに『夜想』にはじめて書いてもらったのが「未生の闇」。以来というか元よりというか「未生」という言葉に囚われて生きている。

ファン・エイクのグリザイユが好きなのは、闇から姿が現れるその瞬間の幽玄を想像できるからかもしれないし、師匠の深瀬昌久の闇に溶込む鳥をこよなく愛した。闇から光、暗黒舞踏の特集はそうキャッチフレーズして土方巽に満足気にニヤリとされた。闇と光と二分するのではなく、そのあわいに身を置くことを身上にしている。

ならば茶室もそういうこと。自然と人工物が混在する、そして出来ているのかいないのかははっきりしない、そんな地点で淡く優しい茶を楽しむ。きりりとしたものの素敵も嘘もだいぶ堪能した。あとはあわいにあるほんとうを楽しむみたい。未生菴—— そんなことから個人的に名をつけた。 ■今野裕一

京都・山科の古民家「春秋山荘」でお茶をめぐって人が集まり事が起こっていくなかで、「夢見る茶畑」の上原美奈子さんが、「竹が余っている里山では茶室作りが始まっているのよ」と示唆してくれたのが始まり。竹の茶室、竹の茶室とことあるごとに言っていたら、草月流のいけばな師 中村美梢さんが「作ってみましようか」と。山荘に出入りして陰に日向に力を貸してくれている庭師の山下良文さんを助っ人に得て、茶室作りが現実のものとなった。竹や立ち木を柱に割り竹を組んで、二日間の奮闘の末に竹の茶室は完成した。お披露目と報告会を兼ねて、東京で展覧会「竹髑髏花髑髏～春秋山荘・竹の茶室に寄せて」を開催し、構想から実現までのいろいろを中村美梢さんに聞いた。(今野裕一)

### Missho Nakamura Interview

「竹髑髏花髑髏～春秋山荘・竹の茶室に寄せて」  
スペシャルイベント 公開インタビュー  
【聞き手】今野裕一  
【会場】parabolica-bis  
【月日】2017.9.3



#### ●金魚が泳げる「添え花」の呼吸

**今野 (以下K)** ● 相場るい児さんの紹介で、僕は美梢さんに会いました。るい児さんの展示をするときに、さっと現れてさっと花を添えてさっと消えていく、すごい人。それが最初の頃の印象でした。美梢さんは器が生きるとな花を生けていて、それを「添え花<sup>ほえはな</sup>」っていうんだと教えてくれた。「なんですか、それ?」と。それがびっくりした出会いの始まりで。「添え花」ってどういうことなんですか?

**美梢 (以下M)** ● 作家さんが器を展示されるときに、ちょっと添える形でお花を入れて、作品の良さを引き出せたら一番いいですね。生かす形に入れていくのが添え花です。最近の言い方だと「コラボレーション」という方が近いのかもしれませんが、日本の良い言葉である「添え花」というのは、

作家さんの作品を生かすかたちの花がいちばん近いかと思います。

**K** ● そのなかで、自分もその器に生かしてもらおう要素があるといっそうおもしろいということですかね。  
**M** ● そうですね。ただ、基本的には個展やこういう展示のときって、器が主役じゃないですか。だからお花があまり出すぎて、花ばかりが目立って作品が死んでしまったら、それはちょっとちがうので。なるべく作品を生かして前に出すぎないというのは気をつけなきゃいけないところですね。

**K** ● 舞台美術でも、違う畑の人が入ってくると、主張することがあります。だけど、誰かが主で誰かが従ってことは実は本当はなくて、両方が100の力を出し切って組み合うとおもしろい。計算して誰かが力を抑えてつくられているものは、それはそれでつまらないですね。その加減がむずかしいし、だんだんより難しくなっていると思

います。でも、全員の力が出る理想のことってほんとにないのかなとずっと思っています。本来は添えているはずの美術が本体を変えていくことがあって、そうした粋なコラボレーションで創作が前に進むのがおもしろいと思っています。

るい児さんと美梢さんがされているのを見てると、今回もそうですが、お互いが好きに力を出してすごいものができたらいいという姿勢を感じるんですが、どうなんでしょう。あるいは草月流の伝統としてそういうことがあるんでしょうか。今日も僕が手を出して勝手にいじってるのを平気な顔してご覧になっていて、おおらかというか、ほとんど不思議に思っていました。

**M** ● (笑)。そういう意味ではこだわりはないのかもしれませんが。共通の知人がご紹介くださって

相場さんの作品に花を添えるようになったんですが、初めて拝見した相場さんの作品が猫にタコが絡まっている作品で(笑)。どうやってこれに花を入れるのかなと思いつつお引き受けして、初めて一緒したのが銀座三越の個展でした。総数100点ほどのうち数点の作品を写真で見せていただいたんですが、「こんな作品を出しますが、ご自分でチョイスして、好きなようにやってください。作品が見えなくなってもかまいません」というくらいの勢いでおっしゃってくださって、ほんとに自由にさせていただきました。とはいえ、最初のころはやはり二人ともどこか遠慮しがちにやっていたんですが、年を重ねるうちにだんだんお互い自由にやれるようになってきて、「じゃあ、壁とかも使っていていいですかね」とか言うようにな

りました。

あるとき金魚の壁掛け作品を制作されて、壁に7~8点ずつらっと掛けられてたんですが、それだやっぱり泳がないんですね。それで、そこに竹の線を入れて泳がせたこともあります。ご覧のとおり、相場さんは今にも動き出しそうな兎や蜥蜴を作られますが、でも陶器なので動かないんですよ。そこに植物を少し入れると、ほんとに生き物みたいになっていく。それがとてもおもしろくて、ずっとやっています。

私自身、もともとそんなにこだわりがなくて、おもしろければそれでいいじゃないか、と。とくにこういう作品は楽しいのが一番じゃないですか。基本「こうじゃなきゃ」というのはありません。みんなが楽しくできれば一番いいと。で、お持ち帰りになった人が思い出して再現しようとされたりしていただければまたおもしろいと思います。

#### ●生えている竹を柱にしてみたら

**K** ● 今回の春秋山荘の「竹の茶室」の場合はどんな感じだったんでしょうか。

**M** ● あの竹の茶室も庭師の山下さんがいたからできた作品です。山下さんからいろいろ「こうしたらどうでしょう」と言っていたので、だからこそできた。それがなかったり、私が強くこだわって「いや、これはこうで」と言っていたら、ああいうふうな感じにはならなかったでしょうね。山下さんがものすごく柔らかい人で、引くところは引いてくださったし、私もいいと思うアイデアはどんどん入れました。だからこそ「やわらかい作品」ができたんですね。

山下さんは庭師さんなので、山や庭木のことに関しては、山下さんの方が私なんかよりずっとご存知です。そういう人の考え方のほうがやわら

かかったりもするし、一緒にするなかで私たちも吸収できるので、おもしろいことは聞いていったほうがいいと私は思っていますね。

**K** ● 竹の茶室は「やわらかさ」なんですね。

**M** ● 場所が竹林の真ん中じゃないですか。そうすると、自然のものってやはりすごく強いので、下手に入ると自然の方が強いんですよ。いろんな作品を見ましたが、これはもう、よっぽどのことをしないと自然には勝てません。いえ、勝とうなんて思っちゃいけなくて。自然に作品をなじませるくらいの方がおもしろいでしょうね。山下さんはああいう場所をほんとうによくご存知なので、そのやわらかさがよく出たと思います。あと、作った場所が山を少し登ったところであって、少し分け入っていくと見えてくるんですが、下からは見えないんですよ。

**K** ● そうですね。約8,000坪ともいわれる敷地の裏山の中腹にあたります。その立木と生きている竹を柱にしてあります。

**M** ● もともと話をいただいたときに「竹林があるので、それを生かして竹の茶室ができないか」という、なかなか無茶なお話がひょこっとやってきました(笑)。私も「杭打って竹を入れて、それは結構大変だなあ」と思いながら考えて、どうせ竹林につくるなら「生えてる竹を柱にしてみたらどうでしょうね」と無茶振り返しをしてみたら、ちゃんと場所を探してくださって、「このあたりでいかがでしょうか」と写真を送ってくださって。

当初お送りした図面はきちんとした五角形なり六角形なりの図面だったんですが、自然のなかに生きているものをそのまま使うなら、そうはいきません。でもそれはそれで、自然のものをそのまま使うのはおもしろいだろうと思ったんです。そこに竹で横線を入れて。それは当然朽ちていきますが、横線なのでそんなに気になりません。壁面の大量の割竹は雨や湿気でカビが生えたり腐ったりしてきますが、まあ、山下さんがいらっしゃるなら、必要なところだけ割竹を替えていた

未生菴／刻々と木漏れ日変化していく

できればいいか、というくらいの感じで設計したんですね。そのくらい簡易というか、融通がきく感じがおもしろいかなと思って。そうしたら、いい感じに馴染みましたね。でもそれも山下さんがいらっしゃるからできたことです。山や自然に



近いところで長年植物をさわってきた庭師さんの見た感じが出てくると思います。

### ●切ったところからその人になる

**K** ● 「自然」と「花をいける」はどういう関係なんですか。

**M** ● 流派によって考え方はまったく違って、「野に咲く花のようにいける」という考え方の流派もあるようですが、草月の場合は、一度切ったら、それは人為的なものだから、野に咲いているようにはいけられないと考えます。あくまで花は、そのいけた人になってしまう、というのが草月の考え方なんです。だからきれいな花であっても、器に入れたときに必ずしもきれいに見えるとも限らないと考えます。なので、まったく自然調にいけることは草月ではあまりなくて、あくまで造形的です。初代家元の勅使河原蒼風(明治33年～昭和54

年、いけばな草月流の創始者)は、「造形」「変化する」と書いてどちらも「いける」と読ませたほど、造形したり変化したりするのが「いける」ということだと、草月流では考えてます。一度切ったら元には戻せないし、「ここから切ろう」と考えるのも人間なので、そこからすでに作為的なものは始まっていて、自然にかえすことはできないということですね。

**K** ● 「人」に「為」と書いて「人為」となるようにですね。

**M** ● そうですね。野に生えているようになっていけられないよ、と。勅使河原蒼風の『花伝書』(1979年、草月出版)にもそれは書かれています。あと、植物や枝を見るときも、日がどっちから当たってた枝かとか、日表・日裏とか、季節感も当然重要だと思いますが、必ずしも季節感が全てではないです。造形的な作品のときには冬でも真夏っぽい花材を使うこともありますし、それはもう全く関係なくやります。

**K** ● 僕は美術を30年やってきましたが、アートってアーティフィシャル (artificial)だから人工物なんですね。より自然じゃないものを人間が無理してつくってる、それがおもしろい。でもやりすぎるとおもしろくないですよ。違えよう違えようと凝って個性を出そうとすると、わざとらしくやったものって、結構みんな同じわざとらしさになるんです。

先日、ここで「夜想鉢物展」という展覧会を開催したのですが、人間が無理やり描いた四角よりも鉢物の結晶の方がきれいだったりするんですね。そうなったときにアートや創作と言われていて世界で人間が何をしているのかを考えると、人為



相場るい児作品に添え花する中村美情。驚くべき現場力。その場で考え、閃き、活かしていく。

と自然の両極のあいだで、どういうことが起きたらいい作品ができるのかは最大の課題です。なかなかうまくいきません。

### ●板一枚の人為

**K** ● 人為と自然(ありのまま)との間で何をしたらいいのかという難しさをずっと考えてきたんですけど、あの竹の茶室を見たときに、それが結構理想的にバランスよく成立している気がして。造形的にデザインされている部分と、竹だからこうなっていた方がカッコいいという部分と、山下さんの生きたまま使いたいという部分と、伐ったときから人為だという部分とが不思議な出会いをして出来上がったと感じています。驚いたのが、そのバランスが、今まで自分がやった仕事のなかで一番よくできてることです。

**M** ● そうですか。ありがとうございます。

**K** ● それで、どうやってできたのか、美梢さんの話も聞きたかったんです。なかなか意図してそこへ行くというのは難しいとは思んですけど。

**M** ● そうですね。あれはほんとにシンプルにできています。立ってる柱に横線を何本か梁のように入れていただいたんですが、わざと斜めに入れたんですね。デッサンではまっすぐに描いていたんですが、あんまりまっすぐかどうかと思って。すると、そこに編み込むような形で直接割竹を入れていくといいんじゃないかと山下さんから提案がありました。今回は1本の竹を8つに割ったんですが、通常だと、それを編むなりして組んで面にして、直線的なものを直線的なまま、ひたすらまっすぐに付けていきます。でも直接編み込んだ方が作業はシンプルだし、入れ替えもしやすい。強度はたくさん編み込むことで確保できます。じゃあそれでいいかと。割竹自体は自然



茶室開きの日の朝

もっと厚いと、しならず、まっすぐになってしまうと思うんです。そうなるかなとちょっと心配だったんですが、わりといい感じにしまって、上が重なってききましたね。

K ● 両側から自重で覆いかぶさって屋根的な状態になったわけですね。

M ● しかもその後、ちゃんと机と椅子を用意してくださって、また格段にいい感じになりましたね。

K ● あれも茶室の基本原理だったのかなと思います。床を張ろうかどうしようかとウンウン悩んでたんですけど、決まらないまま茶室開きの日を迎えたんですね。で、朝9時頃に着くと、茶室に人の気配がするんですよ。上がってみると山下さんがあのしつらえをしてくれていて、ウェルカムティーをどうぞ、と。下は土の地面のまま、机は木の箱、椅子は石と切り株に板を渡しただけ。でもそれがすごくよくて。そこにふさわしいもの

にない人工的な物なんですけど、その編み込んだ形がまたすごく自然なやわらかさになりました。まっすぐな面だともうちょっと人工的になったかもしれませんが、そこが編み込まれることで、横も少しやわらかい感じになったのかなと思います。

K ● 上は自重でしなってるんですか？

M ● ええ、自重で。生なので。両脇からしなる感じがきれいだったので、それを生かして、入り口部分はまっすぐ入れないような形にしました。そのあたりはお互いいろいろ話し合いながらしましたが、それくらいですね。とにかくあまり無理な力は加えていません。当初心配だったのは、何しろよく使う真竹とは全く違う勝手のわからない竹なので、どのくらい曲がるのか、行って実際に見るまで想像がつかなかったことです。行ってみると、意外に思ったより下がっていたので、「ああ、このくらいは下がるんだ」と安心しました。

K ● 竹が重かったということですか？

M ● 厚みがもっとあるかなと心配してたんです。

を見立てて置いた瞬間に茶室として完成したような気がしました。それは僕にはできなかったことで、山下さんが置いたからできた。例えば板一枚で完成したことにもびっくりするわけですけど、その板を自分が置けたかという、ちょっと難しかったかなあ。

山下さんは、春秋山荘の近所に住む庭師さんですが、じつはお茶つながりなんです。最初の出会いは、僕のお茶の師匠が京都のお茶関係の知人に紹介されたのがきっかけです。彼も自分で製茶したり中国茶を淹れたりする人なんです。だからきつとあの竹の茶室の口切りは自分でしようと決めて、あんなふうを迎えてくれたんだと思ってます。そこに板を置いてお茶をふるまうことで茶室がスタートできた。そういうことも含めて、お茶ってこういうことなのかなというのものもあるし、できたことでそこから先をみんなが想像できて

いくこともあって。そういうもの持ってる力ってすごいなと思います。だって板を置くて人為でしょ？

M ● そうですね。

K ● これが合ってると思う板を置いたら、もうずっと前からそこにあるように機能していく一方、その板を1枚置くことによって他の板に取り替えることができなくなる。言い換えれば、山下さんが自分の色をつけてるというか、「自分はこういう風に使いたい」という人為をそこで発揮しているわけですよね。でも、それがいい感じで広がっていく。こういう創造の組み合わせっていうものあるのかなと、おもしろいことが起きていると僕は思うんですね。

### ● 「器」とメディアと空間

K ● 美梢さんは器が大きいんですよね。

M ● そうですね。

K ● 人間の器としても大きいし。

M ● え、そっちですか(笑)。こっちの器(花器)かと。

K ● 僕はそっち(人間の器)を言ってたんですけど(笑)。僕は大きいもののプロデュースの仕事をすることもあるんですが、舞台はキャスティングがすべてなんですね。俳優と演出家を決めたらだいたい決まりみたいなのがあって。でも、美梢さんは、それよりはるかに大きい器を相手にしていて、何にでもいけられると思ってるのかなと。例えば建物に付けてくれとか、部屋をまるごと器にしていけてくれとか、美梢さん、平気でしょう？

M ● 平気だと思います。

K ● 器の感覚ってどうなんですか。この場所もある種の器だと僕は思っているんですが。

M ● そうですそうですね。

K ● 僕らは雑誌をやっているの、なんでもメディアだと考えるんですね。だからこういう会場

竹調花調花調／パラボリカ・ピス

も、その一角のコーナーも、これを見た瞬間に人の心が変わるかどうかを常に考えています。春秋山荘もそういう意味で、僕にとってはメディアなんです。それが美梢さんにとっては器みたいな感じなのではと思うんですが。

M ● ああ、そうですね。生け花をやっていると、花器と花がないといけられないという考え方の方もいらっしゃると思いますが、草月流に限っていると、異質素材だけでいけるテキスト(教本)も出ています。

K ● いわゆる「花」と言われていないものだけでもいけられるんですか。

M ● はい。針金だけだったり、紙やアクリル板、なんでもいいんですけど、それが何を意図しているかという、造形力を意図して異質素材をテキストに入れてるんだと思います。花でも、例えばドライ(フラワー)だったらお水はいらないわけで



すよね。今回は入れてますが、器に必ずしも入れなければならないという考え方は全くなくて、そこにとらわれない自由があります。

生け花には「線・色・塊」という三大要素があります。これは日本文化に共通してあると思いますが、生け花の場合、そこに「空間」がすごく大きく作用します。いわゆる(フラワー)アレンジメントといわれるものは塊で考えていて、比較的どこに持っていても、どんな空間でも合うのがアレンジというものと私は思っていますが、生け花の場合は、その空間でないとできないことというのが大きいです。

日本の生け花はもともと床の間から発生してきていると思いますが、床の間も空間ですよね。その空間をどう生かすか。昔ならそこ(床の間)に書が入ったりお軸が入ったりして、脇だったり中央だったりに花が入ってきました。少ない材料で線を使って、空間を大きく取り込んでいくというんでしょうか。

K● なるほど、「空間の方を取り込む」ですか。それはいけるものの方へいれるということですか。

M● ええ、日本文化はどれもそうだと思いますが、「余白」を大事にしますよね。書やお軸でも余白を残せとよくいいますが、それはなにかというと、見る側に、そこに何を感じさせるかだと思わすね。同じことが生け花にも言えて、線であらわした、この何も無いところも全部、すべてとりこんで何かを訴えるようなところが、これは日本文化すべてにあるのではないかと私は思っています。

K● 空間を使って取り込むということですか？

M● 空間に何かを感じさせるというか、それはわりと日本の伝統芸能の中で比重として大きいのではないかと私は思っています。

K● それは草月流が大きい感じだから隙間重視なんですかね。

M● でもどこの流派を見ても「線・色・塊」は大きくあって、この3つは流派関係なく絶対取り込んでいるはずなんです。なるべく少ない材料で

M● 「ああもういいじゃない」となるんですね。たぶん他の人から見ると足りないと思います。

K● えっ、そうですか。むしろ多いぐらいだと思いますが、よく止まるなど思っています。多い感じの勢いでいって、止まっている人を見るのは、僕は初めてで、ちょっとびっくりしました。

終わった時も名残惜しうじゃないじゃないですか。山下さんもそうですが、竹の茶室も、まだいじれるわけですよ。割竹を何本も足せるし、もっと装飾もできる。けど、ふたりとも「あ、終わった」と……。

M● さっさと片付けた(笑)。

K● その終わった抜け感っていうのかな、足りない感がぐっとくるというか、こういうのが見たかったんだよなと思ったんです。たしかに、ちょっと足りないですよ、やっぱり。でも、僕にとってはそれがバランス良くて。そこがもうとても魅力です。

M● そうなんです。足りないんです。このあたり



はちょっと粗かったなと思うところもありますし。K● でも、そこは自分の想像力でいけばいいところ。その茶室開きの日、朝からお茶をいただいたんですが、木漏れ日に変化していくんですよ。粗くないとあははならないと思うんです。

粗くて足りない分は、持っている人間や買った人間や関係した人間が、自分の流儀と想像力で補えばいい。だからこそメインの部分が理解もで

一枝添えた山牛蒡が片口の「鬮腰舟」を出航させた。

相場るい児 一輪挿し「されこうべ」に添え花

きく空間に作用していこうとなると、線を使わないと。線を使わず全部を埋めるのは大変なことになってしまいます。線を使うことによって、いろんなものをまとめていく部分も出てくるんだと思います。

K● 雑誌も舞台もそうで、僕らも困ったら過剰に

いきます。だから、空間をつくらなきゃいけない、隙間をつくなくちゃいけないというのが命題に入っているのがすごいと思います。たぶん、その空いてる場所って、お客さんが入っていける、遊べる場所でもあると思うんですね。「なんか足りないよな、だめじゃないか」ってお客さんが言ったら大成功で、そこを使ってお客さんは作品の中に入っていける。「すげえ、完璧じゃん」ではだめなんですね。その空き場所というか隙間をどうやったらプロデュースできるかはぼくの命題です。

M● 止めるのって難しいんですね。止められないですっていつてる人ってやっぱりいます。私は止めちゃうんです。というか、だめなんです。逆に。「ここでいい」とどこかで思ったら、もうそこから先、手が動かなくなるんです。

K● 自動的に動かなくなるんですか。

きるし、楽しいんだからいいと思っていて、それができたのがすごい。美梢さんが止まるときに、こころへんできたという手応えは、どんなところで感じるんでしょうか。

M● それがわかりません。ただ、これ以上できないなと思うときがあります。これ以上入れたら壊れるな、と。逆に引いてしまう時もあります。ある程度いけ終わったときに全体を見て間引いたりというのは、必ずやりますね。春秋山荘の竹の茶室も、まだ若干、形が変えられるところがあるかもしれません。イメージ的に「通り道」のような雰囲気があるかなと思っています。通り抜けられたら、茶室が自由になるかも。なかなか通り抜けられる茶室はありませんから。

K● そうするともっと自由になりますね。竹の茶室は、また次の計画を練っていきましょう。

■テキスト:福田容子、田中仁子



中村美梢 [なかもろ・みしゅう] MISHO Nakamura

いけばな師、草月流師範会理事。いけばな草月独自の造形(いける)という精神性に魅かれ、創造することの喜びを感じるようになる。1990年代から商業施設などのディスプレイなどを中心に活動を始める。また、様々な空間を変貌させるいけばなを目指し、インスタレーションを行うなど屋内屋外を問わず活動の場を広げていく。さらに、ハワイ、シドニー、香港など海外でいけばなパフォーマンスを行い、文化交流も行う。最近ではイベントなどのディスプレイやインスタレーション、他分野アーティストとのコラボレーション、出張講師なども行っている。M-Show主宰。

## /// EXHIBITION

### ◆竹藪花藪〜春秋山荘・竹の茶室に寄せて

竹と藪をテーマに器とオブジェを展覧した。二人のコラボも長く、私は相場るい児に中村美梢を紹介された。今、私は製茶を試みているが、茶畑と製茶と花と器と美術と、そしてできれば文学と本と、と思っている。また始まった。(今野裕一)

parabolica-bis パラボリカ・ビス [東京・柳橋] 2017年9月1日[金]～11日[月]



春秋山荘 [京都・山科] 2017年9月22日[金]～11月3日[金祝]



## /// CHAKAI-KI

### 【茶会】季節外れの遊蓮茶屋

2016年10月13日[木] 16日[日]  
会場：parabolica-bis (パラボリカ・ビス)  
菓子：模心果「お釈迦さん」「かわず」

蓮に遊ぶるい児、美梢の茶室の美術。  
遊蓮アリスカップもあり、和洋流麗な時を快樂する。



### 【茶会】季節外れの遊蓮茶会

2016年12月18日[日]  
会場：京都国立博物館／茶室[堤堰]  
菓子：模心果「光明」、聚光「蓮」

蓮をモチーフにした創作茶器(茶碗+アリスカップ)に  
合わせてアートに遊ぶ、作法不問の気軽なお茶呑み会。



### ◆季節外れの遊蓮茶屋 I & II

もう華はなく鬱蒼とした枯れた蓮叢に変貌した上野・不忍の池。蓮見のために通路が池の上に伸びていて、そこを夜に歩くときやはり物の怪の気配を感じる。

ある時、本格的ロータス・ティーが呑みたいと言ったら、「夢見る茶畑」の上原さんが無農薬の蓮の花で蓮茶を試作してくれた。その上原さんは厚木から島根へ茶畑の再生にまた旅立った。来年、本格的蓮の茶作るからと言いついて。そしてその年はまだ茶を仕込んでいない蓮の蕾だけがといた。自分でやってみたら。試しに仕込んでみたら、これが意外と……。

さて、最近、密着して仕事している陶芸の相場るい児さんの藪や妖怪は蓮の葉に載っているものが多い。ならば季節外れではあるけれど、蓮で遊ぼうかと。相場さんの道具を中心に「遊蓮茶屋」を開催して蓮の季節を無理強いして呼び寄せることにした。(今野裕一)

parabolica-bis パラボリカ・ビス [東京・柳橋]

I 2016年10月13日[木]～31日[月] II 2017年12月16日[土]～2018年1月28日[日]



春秋山荘 [京都・山科]

I 2017年12月16日[土]～2018年1月28日[日] II 2018年3月21日[水・祝]～4月28日[土]



### 【茶会】季節外れの遊蓮茶会

2018年1月13日[土] 14日[日] 19日[金] 20日[土] 27日[土]  
会場：parabolica-bis (パラボリカ・ビス)  
お茶：夢みる茶畑 蓮の紅茶  
菓子：菊屋

相場るい児さんの器でいただく蓮の紅茶のお茶会。菊屋さんの蓮の和菓子と、夜想編集長ディレクションの蓮の紅茶で。



### 【茶会】遊蓮茶屋II 蓮茶会

2018年3月24日[土]  
会場：春秋山荘  
竹の茶室「未生菴」

竹の茶室「未生菴」お披露目会  
(中村美梢インスタレーション+蓮茶会)



竹の茶室オープン朝、東京から始発で駆けつけて春秋山荘を開けようとした時、出来たばかりの茶室に何となく気配を感じた。登ってみれば山下さんがお茶の準備をしている。板を敷いた座り席に腰掛けると竹のコップにウェルカムドリンク、そして山下さん自作のお茶を振る舞ってもらった。同行の二人は山荘の掃除をしている。陽が射ってきて木洩れ日が茶室に優しい文様を描き、侘びとか寂びとかそんなことも超越した喫茶の時が訪れた。(今野裕一)

Y o s h i f u m i Y a m a s h i t a I n t e r v i e w

[聞き手] 今野裕一、菊池しのぶ

菊池 ● 初日の早朝、竹の茶室チームのメンバーが山荘に着くともうお二人がいて、割り竹一本でつくったアーチを囲んで、どうするこうするという相談が進んでいたそうですね。私が来た頃には、もうお二人の中では方向性が定まっていて、それに向けて具体的に何をどうするかがぼんぼん決まっていって段階でした。

山下 ● 最初に設計図があったんですが、その通りの感じでは、ちょっと納まってるなど。遊んだ感じにしたいというのはあったので、事前にアーチをひとつ作っておいたんです。「こんな感じでどうでしょうか」と形で見てもらおうのが早いかなどと思って。最初にイメージの共有からスタートできたのはよかったですね。

菊池 ● スピードと柔軟さがすごかったです、お二人とも。

山下 ● 当初は板を編んではめるプランだったんですが、それはものすごく大変そうだなと感じました。それより、横木を渡して編み込んでいく形なら効率的にできます。それで、庭師的にはこういうやり方もありますよと見せたら、「それはいいんじゃないですか」と言ってくださった。もしそれをせずに探り探りでとりあえず始めていたら、どうしても守りに入ってしまって、攻めた遊びは

できなかったと思います。今回は、最初にちゃんと共有したなかでベストを探れた感じです。で、ちょっとおもしろくなく思えてきたら、「こっちの方がいいんじゃないですか」と、また変えていく感じでした。

菊池 ● それで事前に準備を？ 当日だけじゃないですよ。前日に半日とか1日とかされてました？

山下 ● そうですね、半日くらいですね。事前のイメージでは水平で作る予定をしていたので、水平器でレベルを出して、横木の位置すべてに印をつけて。竹もある程度割って材料を作っておきました。いきなりでは進まないで、最初動き出す皆さんの材料だけは揃えておいたんです。おもしろいと思う反面、すごく心配だったので、ある程度

流れを作っておかないと思ったんですね。

菊池 ● ああ、それで私達あつという間に作業が始められたんですね。

山下 ● それで僕は、もっと遊んでいいんだよというのをやりながら教えてもらった気がします。

今野 ● 美梢さん、破天荒な感性の大物ですよ。

山下 ● 僕は仕事柄、全部まとめたがるんですよ。空けたり詰めたりも、すべてきっちり等間隔でやりたくなっちゃうんです。たとえばこの竹の茶室



の横木でも、水平を出して、全部がびしっと揃っていることに快感を覚えるとかですね。やっぱり庭仕事では、「狂つとるやないか」とこれまでずっと言われ続けてきましたので。

今野 ● それはそうですね。生垣とか曲がってたら困りますね。

山下 ● 「寸法、狂つとるやないか」と怒られます。それが身にしみているので、それをばらしてもいいというのが、すごくおもしろいです。

今野 ● 「ばらす」というのは、どんな感じなんですか。

山下 ● 波長を合わせるというか、同調する感覚でした。自分の気配は消してるんですけど、能力は出てくる。美梢さんとチューニングを常に合わせてるという感じでやりました。だから美梢さんのアイデアもすーっと入ってくるし、僕のアイデアも、僕は自我を消してるので、すーっと取り

入れてくださるような感じですね。ちょっと独特の感覚でしたね。

今野 ● 山下さんも、結構、壊してましたよね。美梢さんは美梢さんで別のところできっちりする部分もあって、そこを山下さんがゆさぶってた気がします。

山下 ● 途中で少し美梢さんが抜けた時間帯がありました。その間、ある程度その感じを僕ひとりで保ち続けたいといけなかったのですが、それはそれですごく勉強になりました。他の人がやると、やっぱりその人の手癖や作風があるので、ちょっと違う方向に行きかけたんですね。

菊池 ● ちょっと違う方向ということ。

山下 ● 美梢さんのカラーと違う色が出て来て、おさまりが悪いというか、ちょっと主張しすぎてたというか。それで「違う感じにしましょう」と。そういうことを言うのは苦手なんですけど、あとあと

残ってしまっただけはぐなものになるから、言わないとダメだなと思いましたので。場所と竹に沿ってる感じで、その勢いだけで作ってる方がいい。それは言うてよかったです。

**今野** ● 僕は踊りの演出するときはダンサーに合わせて。ダンサーのバイブレーションに合わせて動かしていく。動かすっていうか、向こうが動いているだけで、自分は出しません。

**山下** ● 今野さんのそういうプロデュースされる話を聞くのがすごく勉強になりますね。相手の才能をさらにドライブさせるのが自分の仕事だという。加速させるというか。僕も庭師として、お施主さんと一緒に組んだ人と、そういうことが、つまりその人がもってるイメージと僕の持っているのを合わせてよりいいものにできるとか、そういうことができるようになるといいなと、この竹の茶室づくりを経験して思いました。

**菊池** ● この場所にして大正解でしたね。でも山下さん、最初から「ここですな」という感じでした

けど、あれは何を見て「ここだ」と思われたんですか。

**山下** ● いや、単純に、ここでお茶を飲みたいっていう(笑)。

**今野** ● ああ、なるほど。

**菊池** ● うん、うん！(笑)

**山下** ● なんか好きな感じ、居心地いいなと感じる場所だったんです。部屋の中でもありますよね。なんとなくこの隅が居心地いいとか、窓辺のここが気持ちいいとか。

**菊池** ● アプローチがあったんですね。

**今野** ● 多分、もともとここに何かあったんです。それで動線というか、何かこう……。

**山下** ● 流れがありますよね。その気配が。なんにもないところにぼつんと作っても、たぶん浮いてしまいます。

**今野** ● 最初からそれを読み取ってたんですね。

■テキスト:福田容子、田中仁子



●竹の茶室  
「未生庵」記

- |                         |                             |
|-------------------------|-----------------------------|
| 2017                    | 2018                        |
| 7月22日[土]、23日[日] 竹の茶室づくり | 3月24日[土] メンテナンス             |
| 8月13日[土] 茶室開き           | 3月24日[土] 「未生庵」相場いん作 表礼 お披露目 |
| 8月13日[土] オープン茶室         | 3月24日[土] 中村美梢インスタレーション、蓮茶会  |
| 9月10日[土] オープン茶室         | 3月24日[土] オープン茶室             |
| 10月8日[日] 庭師茶会           |                             |
| 森村泰昌 モリーダ・カーロの春秋山荘大茶会   |                             |
| 10月8日[日]、9日[月] 阿部克彦の喫茶去 |                             |
| 森村泰昌 モリーダ・カーロの春秋山荘大茶会   |                             |
| 10月9日[月] オープン茶室         |                             |

/// 竹の茶室づくりレポート

■7月22日(土) 一日目  
山荘に着くと作業はすでに始まっていた。美梢さんと山下さんが邂逅してイメージと作業が立ち上がっていく最初の場面に立ち会えなかったのが非常に残念。作業は二班にわかれて進行。骨組みをつくる班数名、竹を割る班数名。

竹割り班は、竹を切り出し、枝を掃う。八つに割る。中の節を金槌やなたで掃ってきれいにする。長さ、太さ、向きを仕分ける。という手順。最初は不慣れで手こずりつつの作業だったが、大きな竹を全員で運んだり、楽しい霧囲気が進む。とはいえ、真夏の太陽のもと、だんだん無口になっていく。暑さに疲れてくると、作業に没頭するの。茶室班は美梢さんと山下さんで話しあいながら、やってみながら、割竹を挿していく。

昼休憩をとり、水分とエネルギーを補給してひとこち。母屋では「夜想 鉱物展」御菓子丸さんのお菓子の会が行われている。渡る風と木々の匂いが気持ちよい。石垣の間にちよろちよる出てきたトカゲを追いかける。

午後になると割竹班も作業の要領がつかめて、流れがよくなってきた。竹を割るときは、他の作業をしている人も中断して、最低4人で協力するのやりやすいことがわかり、八つ割りを引く人、前で支える人、後ろでサポートする人など、役割分担ができてくる。やがて、八つ

割つより、一度四つ割りにしてそれを半分に裂くほうがラクで早いとわかってくる。

14時すぎ頃、割る竹がなくなり、竹の伐採方法を山下さんに習う。さすがに消耗するので、適度に水分補給、休みながら進行。夕方、進行中の作業にメドをつけてこの日は終了。終了後、裏の川で涼む。水が冷たくて生き返る。

■7月23日(日) 二日目

朝から作業を続け、昼前までに、両側面はほぼ埋まってきた。奥の面をどうするか。美梢さん、山下さんで試行、確認。竹割り班は分業制で、四つ割りにするときは皆で協力。

昼休憩を挟んで、午後も肅々と作業進行。途中で、ワークシヨップと準備のため美梢さんが抜けたりしながら、山下さんが方向性を見る。竹割り班と茶室班を行き来する人もちらほら。15時頃、おやつ休憩。よく冷えた「したたり」。黒糖の甘みに生き返る。この時点では、入り口はまだ骨組み中。

ワークシヨップを終えた美梢さんが合流し、奥面を確認後、手をつけ始めた入り口面をデザインシヨップする。

17時30分頃、竹を挿したいところがなくなつて、「あれ?できた?完成?...完成!」という瞬間がふいに訪れた。というように私には思えた。(菊池しのぶ)



## /// WORKSHOP

あるもので作る。作って使う。使って遊ぶ。

2017年1月、春秋山荘の庭にチャノキを植えた。上原美奈子さんと一緒に「夢見る茶畑」を世話している製茶師の阿部克彦さんが持ち込んでくれた武夷種の苗が6株。小さな小さな茶畑だ。猫の額の周囲は生い茂る竹林で、生い茂りすぎてチャノキたちに日が届かない。日当たりをよくするため、3月に山下さんの指揮で竹を間伐した。間伐した竹や笹をどうしようかと言っていたら、ほうきや竹垣や竹小物ができるといふ。それなら、ということで山荘に必要な庭まわりやお茶の道具をつくるワークショップを開催した。なんだかんだでやっぱりお茶つながりの山荘企画なので、何かしらお茶とお菓子が伴う。(福田容子)

### ◆ 箒茶会——手ぼうき作りワークショップ+アフター喫茶去

2017年5月14日【日】

【講師】 庭師：山下良文 【菓子】 聚洸「岩根つじ」



### ◆ 竹のコップをつくろう

2017年10月9日【月祝】

【講師】 庭師：山下良文 【菓子】 聚洸「銀杏餅」「山づと」「栗蒸し羊羹」ほか



### ◆ 中村美梢ワークショップ「竹と植物で遊ぶ」

2017年7月23日【日】

【講師】 いけばな師：中村美梢 【菓子】 亀廣永「したたり」



■ 生け花にはガチガチに「型」があるイメージを持っていたが、草月流はとてゆゆるやか。中村さんいわく「自由に、好きに、生けてください」。心惹かれる形の枯れ枝があったので、おずおず尋ねてみると、「まったくOK。植物以外のものを使ってもよい」と聞き、さらに楽しくなった。

春秋山荘の庭という「世界」に積極的に介入していく緊張感。宝探のようなワクワク感。「生けてみたい枝」「いい感じの枝」探しというフィルターを通すと、ただ眺めているだけの時より、植物たちのカタチがよりくつきりと目に飛び込んでくるようになる。実りの豊かさを予感させる山椒。赤ん坊のこぶしのようなシダの芽。やわらかな曲線を描くツタ。形にキャラクターが見えてくる。遠慮しながら入れていると平面的になってしまい、修正しようとするバランスが悪くなり、試行錯誤。おもいきって山椒の大きな枝を切ってきて足してみると、ぐっと立体的ダイナミックに。先生やほかの参加者の方とアイデアを交わしながら「仮留め完成」を目指した。

着物で正座して生けるものというイメージがあったが、こんなふうには竹をのぎりで切って花器にするなんて！（笑） 完成後はお茶を飲みながら生け花の「今」を聞いた。東京では生け花人口が減っていて、花屋さんで枝もの取扱いが減ってきているという。通常は用意された花材で生けるしかない。今日は格別に贅沢な時間だったとあらためて感じた。（松井路代）

風來展 [風媒の種子]

風は風神として、鳥形の神とされた。風神がその地に風行して風気・風土をなし、人がその気を承けて風俗・気風・風格をなす。さらに風情・風教のように、その語義は幅広いものとなった。その「風」にとこからともなく吹き寄せられてきたsomethingが集った春秋山荘の夏の記。

(福田容子)



風來展[風媒の種子]  
2017年7月1日[土]~7月30日[日]  
会場:京都・山科 春秋山荘

◆岩下徹 (ダンス) 即興セッション

2017年7月15日 [土]

出演: 岩下 徹 (ダンス) Michel DONEDA (ソプラノサクセス) Lê Quan Ninh (パーカッション)

フランスから来たミュージシャンは、リハそこそこに目の前の小川で遊びはじめた。足をつけばちゃちゃ楽しそうに語っている。ああ、即興ってこういうことなんだと。空気と人と、場と……。身体に融合して……いやいやそんな話じゃなくて、何とでもどこでも会話できるこの感じなんだと。それをちょっと離れて見ている岩下徹。山海塾の舞台はずいぶん見ているけれど、身体から柔らかい陽の薫りがたっている。人に見せるんじゃなくて人に居てもらおう、人と場を共感する。それが劇場でないところで成立する即興

なんだなあ。ミュージシャンだけでなくダンサーが居ることで、場が広がる。観客の心が遊ぶ場所が広がる。(今野裕一)



◆「SKANK × いはらみく」パフォーマンス

2017年7月23日 [日]

出演: SKANK、いはらみく

昨年もパフォーマンスを上演させて頂いた春秋山荘。今年は昨年ほど暑くはなかったけど相変わらず独特の空気感が山荘周辺を漂っている。今回は「風」というお題。これがなかなか難しい。パツと思いつくキーワードがなんとも陳腐で。例えば「夕日」とか「空」みたいなタイトルの曲を良いと思ったことがないのは自分のボギャブラリーの無さが原因なのかも知れない。音楽家の私とダンサーである「いはらみく」さんはそれぞれ東京と関西に住んでおり。そのやりとりや距離や速度感をお題に絡めてキーワードを絞っていきました。上演時間は18:30から。ちょう

ど日が暮れていくことを認識しやすい時間。山がどんどん暗くなり虫たちが鳴き始め空気もはっきりと変わっていく。パフォーマンスは「行為」という「時間軸」の中で音が音楽になる、行為がダンスになるを行ったり来たりする「移り変わり」を夕暮れと共に形にしていけたと思っています。状況によって私たちの意図は意志と関係なく変化し、時にはその変化に気づかない。それはとても優しくて恐ろしい。それこそが私にとって最も印象的な「風」のイメージのひとつでした。

(SKANK/Nibroll)



photo by Emile Beauchemin

何十年前、春秋山荘を根城にしていたことがあった。朝一で町にでて祇園湯で倶利伽羅紋の人と二人きりで湯をつかって、南座の楽屋の吉弥の部屋に潜り込み開幕を待ち、芝居を見て、祇園が新門前でご飯を食べ、イノダ珈琲三条店で珈琲を飲み、そしてまた山に帰り、囲炉裏に火を入れ、白湯を飲み、五右衛門風呂に薪をくべ、湯に浸かる頃には明け方の月と星が冷たく輝いていた。

見るものは巴会の井上八千代であったり、北野踊りの福鶴さんだったり、祇園の里春さんだったり…その時々で異なっていたが、概ね踊り、そしてもう今しか見られない……何と言うのだろうか熟した柿が枝についてそのまま芳醇になって干し柿になっているという……いや

例えば巧くない。あの時、歳は大人だったけど若造だった。何で何かに書きとめておかなかったのだろう。と、ちょっとだけ思う。

それはともあれ、今の春秋山荘は、あの時と同じ春秋山荘とは思えない。ほんの少し庭を触ると、そこにかけて道があり頂上のほうに向かっていくことに気がつく。何も示唆してはくれないけれど何かが生れる予感もある。壊れるものがたくさんあって、それに応じて生成もあるが、できることなら、過去をなぞらないようにしようと思いがける。新しいとかそんなことではなく、試み損なった静かな破天荒を生起できれば。あの素晴らしい創造者たちの影に添いながら。

■今野裕一

春、再び美梢さんと山下さんが揃い、有志が集まって、夏の豪雨と秋の台風と冬の降雪に耐えた未生菴の手入れをする。奥や山の上にも手を入れたいし、秋にはそこで観月茶会なんてできたらね。どんなことになるのか想像がつかないからワクワクする。なるのがわからないところへ。そんなことを言い合いながら、誰かひとりの思い通りでなく誰ひとり青写真を持たないX地点を通過する。効率と等価交換が幅を利かせているからと

いって、どうも世の中そればかりではないらしいことが、ここにいると沁みしてくる。この半年で、頼もしい仲間も増えたと、この場所や山荘の物語について今になってわかってきたこともある。一年ぶりの「夜想茶会記」は竹の茶室をめぐる号になりました。次はお茶(とお菓子)です。お楽しみに。

■福田容子

◆展覧会

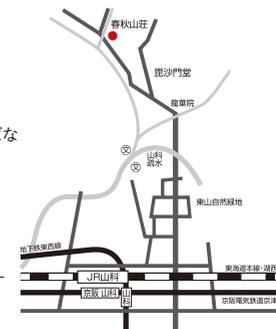
番外篇・遊蓮茶屋Ⅱ [京都山科展]

2018年3月21日 [水祝] ~ 4月28日 [土] ※会期中の金・土・日・祝のみopen



[Artists]

- 相場るい児 / 陶芸
- 麻生志保 / 日本画
- 江村あるめ / 人形
- 桑原聖美 / 日本画
- 佐久間友香 / 日本画
- 中村美梢 / 草月流いけばな



京都・山科 春秋山荘 京都市山科区安生稲荷山町6 TEL:075-501-1989 各線山科駅徒歩約20分、駐車場有

Parabolica-bis HP <http://www.yaso-peyotl.com/> Twitter | [https://twitter.com/yaso\\_peyotl](https://twitter.com/yaso_peyotl)  
FB <https://www.facebook.com/YeXiangYasoParabolicaBis>  
ShunjuSanso FB <https://www.facebook.com/syunju.sanso/> Twitter | [https://twitter.com/syunju\\_sanso\\_ky](https://twitter.com/syunju_sanso_ky)

夜想茶会記 #07 2018年 3月24日発行 発行人 ◆夜想+今野裕一 デザイン ◆ミルキィ・イソベ 安倍晴美 編集 ◆福田容子 田中仁子 夜想茶会記運営 ◆井上佳奈 菊池しのぶ 田中仁子 延原圭亮 福田容子